

特別講演 1

「肺癌は疑うのに、間質性肺疾患は疑われない？」

—早期診断と専門医紹介の重要性—

福井大学医学系部門 呼吸器内科学分野教授

早稲田 優子 先生

間質性肺疾患 (interstitial lung disease:ILD) は多様な疾患群からなり、初期には症状や画像所見が非特異的であるため、日常診療の中で見逃されたり経過観察とされることも少なくない。一方で近年のILD診療では、早期に気管支鏡検査 (BAL やクライオ生検など) を行い、臨床・画像・病理所見をもとに多職種による検討 (multidisciplinary discussion: MDD) を行うことで診断と治療方針を決定し、早期治療につなげることが重要とされている。また、抗 MDA5 抗体陽性ILDでは早期診断・早期治療が予後を大きく左右し、また肺移植を検討する症例では年齢を考慮した早期の専門施設紹介が不可欠である。本講演では、日常診療で間質性肺疾患を疑うためのポイントと、専門医紹介のタイミングについて、最近の診療の流れを踏まえて解説する。